



不吉な消息

フォーゲットライトハウス 照明室

ここは、テトラクリスタルアイランドから少し離れた場所にある、無人の灯台。
時刻は夜、空は雲に覆われ、月は雲の上にあった。

その灯台は灯台と同じ大きさの島の上に立っており、白い外見をしていた。
だがその灯台は、灯台としての役目は果たして折らず、今は明かりが出ていなかった。
その照明室に、1つの人影が。

「・・・ようやく、時が満ちた・・・」

人影はそう言うと、雲に覆われた空が少し晴れ、まだ少々雲がかかった月が顔を出した。
綺麗な形をした、満月だ。

「俺は、この時を待ち望んでいた・・・ 堕ちて数年、この綺麗で不吉な満月の夜を・・・」

照明室にいる1つの人影はそう言うと、空の雲は一気に流れ始め、満月が照らされた。
だが、空に浮かぶその月は黄色では無く、黄昏時のような橙色をしていた。

「この時から明日のこの時間までに・・・ 俺はこの世界に住む存在達を、消してやる。」

すると、灯台に月明かりが照らされ、人影に色が出始めた。
澄んだ空色をした、綺麗な体が。

テトラクリスタルアイランド南 草原エリア

そんな宣言をしている人物がいる事も知らず、ストレンジャー達のいるテトラクリスタルアイランドに朝日が降り注いだ。

「う、ううーん・・・ よく寝た・・・」

島の南側、草原エリアの大きな家の一室。

アルドールがベットの上で目を覚まし、体を起こしていた。

「今日もいい天気。」

アルドールは部屋の窓辺へと移動し、外の天気を見た後着替えを始めた。

本日の島の天気もよく、綺麗な青空の広がる晴天だった。

アルドールは着替えを済ませると、族長スタイルで外へと出た。

「うーん・・・ 朝の空気は清しいわ。」

アルドールは体を伸ばしつつ辺りを見渡した。

まだ朝が早い事もあり、とても静かだった。

特に人影は見たらなかったが、1つだけ人影があった。

「・・・？」

アルドールは人影の近くへと移動した。

そこには空色の綺麗なボディに紫色のサングラスをした蛇がいた。

普通の蛇ではなく、背中に大量の翼を生やしていた。

「おはようございます。 見かけない方ですが、どちらから来たんですか？」

アルドールは少し見かけない事もあり、少々警戒しつつ話しかけた。

「遠い場所だ。 ここよりもな。」

そこにいた人物はアルドールの顔を見ずそう答えた。

だが彼の表情は少し暗く、彼の視線は空を指していた。

「・・・寂しいんですか？」

アルドールはそんな蛇の顔を見つつ、そう言った。

すると彼は特に何も言わず、その場に立ち上がった。

「寂しいを通り越して、何も思わないさ。」

そう言いつつ、アルドールの方へと向いた。

「お名前、聞いてもいいですか？」

「・・・ フォーティテュード・ザ・サーペント。」

アルドールがそう言うと、蛇は自分の名前を名乗った。

テュードは名前を名乗ると、目を瞑りつつサングラスを外した。

「最初の犠牲者にはあまり相応しくは無いが、消えてもらおう。」

「え？」

テュードはそう言うと、アルドールの方へ向きつつ瞑っていた目を開けた。

「！ キャッ！」

ピシッ！

すると、テュードの目からレーザーに近いビームが飛び出し、アルドールを襲った。
服に命中すると、一瞬のうちにアルドールを石化させてしまった。

「まずは1人・・・」

テュードは再びサングラスをした後、石化させたアルドールを見た。

避けようとしたアルドールの姿が綺麗に石となっており、彼女は動きそうになかった。

「次。」

テュードはそう言うと、石化したアルドールを持って何処かへ飛んで行ってしまった。

中央 泉の庭園

その頃、ストレンジャーは目を覚ました後にいつもの花園へ向かい、島の中心へと向かっていた。

「今日もいい天気だな。」

泉のある島の中心へ到着すると、ストレンジャーは空を見つつそう言った。
本来今日は特に集まり等は無いものの、なんとなくココへ来たのだ。

「ようストレンジャー」

ストレンジャーが空を見ていると、別の方角の森からピスフリーが現れた。

「おはようピスフリー」

「おはよう。」

「あら、2人ともおそろいね。」

2人が挨拶を交わしたのと同時に、さらに別の方角からジョイがこちらへ向かってきた。

「おはようジョイ。 なんだか今日も集合しちまったな。」

「奇遇よね。 いつもココに来ようとすると皆がいるんだもの。」

「そうだな。」

3人は軽く挨拶を交わし話をしていた。
だが、もう1人は数分立っても姿を現さなかった。

「そういえば、アルドール来ないわね。」

「具合でも悪いのか？」

ジョイとピスフリーはそう言いつつ、いつもアルドールが来る方角の森を見ていた。

「ちょっと見に行ってみよう。」

ストレンジャーがそう言うと、2人は同意しアルドールの家へと向かって行った。

南側 草原エリア

ストレンジャー達がアルドールの管理する草原エリアへ到着すると、異常な風景が広がっていた。

「？」

そのエリアに住む朱雀達が全員外へ出ており、誰かを探している様子だった。

「なんだ？」

「！ スtrenジャー！！」

ストレンジャー達は何が起きているのか考えようとする、とある方向から声をかけられた。声のした方を見ると、アルドールの父親が血相を抱えてこちらに向かっていた。

「？ アルドールのお父さん。」

ストレンジャーは慌てているアルドールの父親を見つつ言った。

「君達、娘を見なかったか？」

父親は少し慌てつつもストレンジャー達に問いかけた。

「アルドール？ いや、見てないんだ。」

「昨日の夕方に会ったきりで、今日はまだ見てないわ。」

「何があったんですか？」

ピスフリーとジョイがそれぞれ言い終わった後、ストレンジャーは問いかけた。

「今朝から娘の姿が無いんだ。 ベットにも姿が無くてな。」

「え！？」

ストレンジャー達は驚きつつ言った。

「アルドールが家出・・・！？」

「そんなことするとは思えないぜ？」

「心当たりはありますか？」

ストレンジャーは別の疑問を問いかけた。

「いや、夜に口論をしたと言う訳ではない。 数日間でもそう言う記憶は無いんだ。」

「家出じゃ無さそうだな。」

ストレンジャーは情報を仕入れると、家出と上がった仮説が違う事を決めた。

「じゃあ、行方不明って事になるわね・・・」

ジョイは呟くようにそう言った。

「俺達もそれぞれで行きそうな場所を探してみます。 何か分かったら教えてください。」

「わかった。」

ストレンジャーはアルドールの父親にそう告げると納得し、この場を後にして行った。

「俺達も探してみよう。 この島は他の人達が探してると思うから、別の場所で移動できる範囲を。」

ストレンジャーは今からする行動を新たにし、ピスフリー達に言った。

「わかった。 俺はとりあえずマスターの所に行って見る。」

「アタシはビーイングキャッスルに行って見るわ。」

「そうすると、俺はトロピカルアイランド周辺だな。」

3人はそれぞれで行ける範囲の場所を探す場所を決め、行き先を決めた。

「じゃあまた後で。 散策が終わったら泉の庭園で落ち合おう。」

「了解よ。」

「ああ。」

3人はそう言うと、決めた行き先に向かって行った。

残したメッセージ

ビーイングキャッスル

「コレでとりあえず全員か・・・」

城のとある一室で、テュードは呟くように行った。

その場所とはチェリーの部屋。すでに彼の目の前には石化してしまったチェリーとティザーの姿があった。

2人も攻撃を避けようとしたのか、逃げようとする状態で固まってしまっていた。

テュードはしばらく石化した2人を見ていたが、不意に

「・・・だが、違うみたいだな。そこの奴、出て来い。」

部屋の扉の先から気配を察し、テュードは睨みつつそう言った。

だがそこから顔が出ることは無く、しばらくあたりに沈黙が広がった。

『チッ、察しちまったか・・・』

テュードが睨む扉の後ろ。そこにはプレスルが気配を消しつつ様子を伺っていた。

だが相手に気配を察知され、動くにも動けない状態となっていた。

『奴はやバイな。1人じゃ無理か・・・ どうする・・・』

プレスルはこの先の行動を決めようと考えていた。

すると、部屋から声がした。

「・・・ まあいい。その気ならこちらから行かせて貰おう。」

テュードはそう言うと、猛スピードでプレスルの方へと向かって飛んできた。

『来る！』

プレスルはその場からジャンプし離れた。

シュンッ！ ガラガラガラ・・・

ジャンプしたのと同時に、プレスルの後方で何かが崩れる音がした。

「さすがだな。 やはりここらの存在達はそれなりの行動は出来るわけか。 女性人と違い、動きもいい。」

テュードはそう言いつつ、プレスルの方を見ていた。

彼の近くには壊れた扉の残骸が転がり、手には大きな鎌が握られていた。

「ただの存在じゃないな。 お前、何者だ！！」

プレスルはその場に立ち上がり、テュードを睨みつけた。

「ただの朽ちた天使さ。 だが、天使といえる面影は何処にも無いがな。」

テュードはそう言いつつ、少し前へと出た。

するとそれに合わせ、プレスルは数歩後ろへと下がった。

「ココでお前を殺す事は簡単。 だが俺は後処理をするのが苦手だ、逃げられてたら拉致があかねえからな。」

テュードはそう言うと、持っていた鎌を消し、サングラスを取った。

「消えてもらう。」

すると、テュードの目からビームが飛び出し、プレスルを襲った。

「チッ！」

プレスルはその攻撃を避けようとその場をジャンプし、近くの曲がり角へと逃げた。だが数秒動くのが遅く、靴のつま先にビームを喰らってしまった。

『しまった！！』

プレスルは跳んだ先で転がりつつ体制を立て直し、左足を見た。
靴は元の灰色より薄くなり、石となっていた。

「擦れたか。 だが当たったに違いないからいいか。 徐々にお前は石になる。」

テュードがそう言うと、石化がゆっくりと進み始め左足首を徐々に登ろうとしていた。
プレスルは足を確認しつつ、こちらに接近してくる気配を感じた。

『ココにいたらマズいな・・・ 誰かに報告しなければ！！』

プレスルはそう思うと、近くにあった窓から身を投げ、海へと入った。

「・・・ 逃げたか。」

テュードはプレスルのいた場所に到着すると辺りを見渡し、呟くようにそう言った。

「・・・ 後の回収が厄介だな。 だが行き先はさっきの島ぐらいか。」

プレスルの行き先を軽く推測すると、テュードは再び部屋へと戻って行った。

テトラクリスタルアイランド周辺 海上

「行くなって決めたはいいけど、ちょっと遠いわね。」

ビーイングキャッスルとテトラクリスタルアイランドの間にある海。
ジョイは少し早足で歩きつつ、ビーイングキャッスルを目指していた。
だが亀だという事もあり、進むスピードは少々遅い。

「・・・？ アレって。」

ジョイは海を歩いていると、前方に人影を見つけた。
そこには見覚えのある人物の姿が。

「プレスル！？」

ジョイは海を泳いでいたプレスルを見つけ、駆け寄った。

「・・・ジョイか。」

プレスルはこちらに駆け寄ってくるジョイの姿を見つけ、そう言った。

「ちょっ、大丈夫？ 凄い疲れた顔してるわよ。 鎧姿で海に入るなんて・・・」

少し疲れた様子で海にいたプレスルを心配しつつ、ジョイは言った。

「ちょっと緊急だったんでな。 海に入ったんだ・・・」

「とりあえず、1回島に行くわよ。 手を離さないでね。」

ジョイはひとまずプレスルを海から引き上げるため、プレスルの手を引きつつ島へと戻って行った。

「気をつけろ・・・ 俺達の命を狙っている人物が、いる。」

「なんですって？」

島へと行きつつプレスルの話を聞いていたジョイは耳を疑った。

「どういう事？ 命を狙っているって。」

「すでにチェリー様とティザーがやられたんだ・・・」

プレスルはそう言いつつ、ジョイに引かれたまま懸命に島へと向かって泳いだ。

「相手はどんな奴なの？」

ジョイは島の浅瀬に到着すると、プレスルを海から引き上げた。

「空色のボディに大量の翼を持った蛇だ。 自分の事を朽ちた天使と言っていた。」

「朽ちた天使・・・」

「奴の目に気をつけろ。 眼光を浴びると石になる。」

プレスルはそう言うと、まだ動く両手を動かして全身を浜へと上げた。

すでに下半身が石となっており、段々と上半身を石へと変えていた。

「嘘・・・」

「すまないが後を、頼む・・・ もう無理そう、だ・・・」

プレスルはそう言うと目を瞑り、その場に倒れた。

そして、倒れたままの姿で石になってしまった。

「ちょっとプレスル！！ プレスル！！」

ジョイは石になってしまったプレスルに声をかけた。

だがプレスルは返事をしなかった。

「どういう事なの、狙ってるって・・・ もう、死ぬ姿を見るのは嫌なのに。。。。」

ジョイはその場に座り込んでしまい、プレスルを見つつ涙を流した。

「・・・泣いちゃダメよ私。 プレスルが命を代えて教えてくれたんだもの。 早くストレンジャー達に教えないと！」

ジョイは流していた涙を手で拭い、ビリーブのいるストレンジャーの家へと向かって走り出した。

ビーイングキャッスル周辺 海上

ビーイングキャッスルの近くの海の上。

そこには2つの人影があった。

「まったく、何で俺まで付き合わなくちゃならないんだか・・・」

ホープはラッパに座りつつ、両手で抱えた大量の紙袋を持ちつつ愚痴を溢していた。

「いいでしょ？ 暇だったんだから。 文句言わないの。」

「暇って、お前が勝手に決めたんだろ。」

ホープの隣にはホネスティが飛んでおり、こちらはホープよりも少なく軽そうな紙袋を1つ持っていた。

2人は朝早くから城を出ており、飛んで数時間の場所にある島へ買い物に行っていたのだ。

買出しというわけではなく、ホネスティの趣味の買い物だ。

買ってきた物の主は品は、ガーデニング用品だ。

「それにしても、城にはストレンジャーが作った花園があるんだから別に要らないだろ？ コレ。」

「馬鹿ねホープ。 庭園の花だけじゃ物足りないから買ってきたんじゃない。 別に自腹なんだからいいでしょ？ ティータイムも奢ったんだから。」

『若干買収された気がするな・・・』

ホープはホネスティの言った事に内心呆れつつ、城を目指して飛んでいた。

そして城へと到着すると、城の高い位置にある物見台に2人は降りた。

「到着一っと。 ホープ、それ部屋まで運んで頂戴。」

「へいへい。」

ホネスティはホープに命じると、先に部屋へと向かって降りて行った。

『・・・ 本当に何やってんだか、俺。』

ホープは大きい溜め息を1つすると、ホネスティの後を追いかけて城へと入っていった。

階段を降り、ホープはホネスティの部屋に持たされた紙袋を置いた。

「コレでいいか。」

バタバタバタ・・・

「・・・？」

部屋を後にし廊下に出ると、ホープは急いでこちらに向かってくるホネスティを見つけた。

「大変よホープ！！」

「ホネスティ、城内で走るなよ。 ティザーに怒られるぞ？」

自分の前で息切れしているホネスティを見つつ、ホープは言った。

「アリス様や皆がいないの！！」

「なんだって！？」

ホネスティはそう言うと、ホープはその場を走り出した。

ホネスティが息を整えた頃。

「・・・いないな。」

ホープは城内を一周し、誰もいないことを確認してホネスティの元へと戻ってきた。

「朝は皆いたし、何処かへ出るなんて聞いてなかったんだけど・・・」

「それにキッチンのボードにメモが無かった。 外出ってわけじゃ無さそうだな。」

ホープはキッチンから拝借してきたホワイトボードを見せつつ、ホネスティに言った。

ボードには今日のランチ、ディナーのメニューが書かれており、他には何もかかれてなかった。

「そうよね、いつも出かける時とかはティザーが必ずメモを残してたもの。 どうして・・・」
「消息、って事になるな。」

ホープは一通りの状態を確認した後、結論を出した。

「アリス様の部屋！！」

2人はほぼ同時にそう言うと、急いでチェリーの使っている部屋へと向かって行った。

「！！」

2人がチェリーの部屋へと繋がる廊下へと来ると、無残な光景が広がっていた。
部屋を仕切る大扉が壊され、残骸が転がっていた。

「アリス様！！」

2人は部屋へと入り、辺りを見渡した。

「嘘！！ コレって襲撃って事！？」

「いや、襲撃じゃない。」

ホープはそう言いつつ、部屋を見た。

特に部屋が荒らされた形跡もなく、何かと戦った後も残されていなかった。

「扉だけ壊されて、部屋はなんとも無い。 襲撃にしては変だ。」

「じゃあ、いったい・・・」

2人は部屋を隅々までチェックし、何か痕跡が無いか探した。

「！ ホネスティ。」

ホープは何かを見つけ、ホネスティを呼んだ。

「どうしたの？」

「コレ。」

ホープはある場所を指差した。

そこは小型のソファがあった場所の後ろで、そこには何か書かれた傷があった。

「えっと、傷？」

「ティザーから聞いたことがある。 緊急メッセージだ。」

ホープは削られた後を手でなぞりつつ言った。

「メッセージ？」

「ああ。 城で何かあった時、誰かココに来た第三者に何があったか伝える物として用意したものだ。」

ホープは説明しつつ、目を瞑った。

「なんて書いてあるの？」

「・・・ 『城に侵入者、敵は単体蒼き蛇に石化の瞳。 主人は、石』！？」

ホープは文字に触れると、メッセージを口ずさんだ。

「侵入者！？」

「アリス様達は侵入者にやられたんだ。 でも何処に行ったんだ・・・」

ホープはその場に立ち上がり、少し考えた。

「ホープ。」

「探そう。 俺らが助かったって事は、他の人がやられる可能性があるわけだ。 テトラクリスタルアイランドに行くぜ。」

「わかったわ。」

2人はこの後の行動を決め、部屋のバルコニーに出た後、空へと飛び出した。

カフェ『Middle Garden』

「♪～ ♪♪～～」

こちらは、ラプソディが経営するカフェ『ミドルガーデン』
今は店内にはお客は居らず、鼻歌を歌いつつラプソディは、1人皿拭きをしていた。今は結構
ご機嫌のようだ。

リリリン♪

すると、店内のドアベルが音を鳴らし、来店者が来た事を告げた。

「いらっしゃいませ～」

お決まりの挨拶をしつつ、ラプソディは入り口を見た。
そこには空色のボディに大量の翼を生やした蛇、テュードが飛んでいた。

「・・・静かな所だ。」

テュードは呟くようにそう言うと、カウンター席へと移動した。

「何になさいますか？」

ラプソディは笑顔でテュードに話しかけ、注文を聞いた。

「・・・」

テュードはそう言われ、少し悩んだ。

「卵スープとかはいかがですか？ 好きなんでしょ？」

「え・・・」

悩んでいたテュードを見て、ラブソディが不意に言った。

「何で俺が好きだと知ってるんだ。」

テュードは不意に思い、ラブソディに問いかけた。

「何でだと思いませんか？ 墮天使サマエルさん。」

「・・・ ただのマスターと言う訳ではなさそうだな。」

テュードはラブソディの言った事を聞き、簡単な仮説を立てた後そう言った。

「寂しいんでしょ、1人でいるのが。 心にも体にも傷を負って。」

「・・・」

ラブソディはそう言いつつ、卵スープを用意し始めた。

「存在は誰でも1人でいる事を好きで好む人はいません。 誰もが訳があって好むんです。 でも心の中では誰かを欲しがっている。」

「・・・そうかもしれないな。」

テュードはそう言いつつ、ラブソディを見ていた。

「貴方の場合、危険とされ殺されてしまい、天使として生まれた貴方は朽ちてしまった。でも、」

ラブソディは話しつつ、カウンターに出来たてのスープを置きつつ言った。

「貴方の心は冷たく凍ってしまっている。 二度と他者を信用しないと決めてしまったから、閉ざしているんですよね。 ココは。」

テュードの心を、ラブソディは指差しつつ言った。

話を軽く聞きつつ流しつつ、テュードは置かれたスープを飲んだ。

「美味しいな。」

「よかった。」

ラブソディはテュードからの感想を聞き、嬉しそうに言った。

「なんで嬉しそうな顔をしてるんだ。」

テュードはサングラス越しにラブソディの顔を見つつ問いかけた。

「だって、貴方は優しい顔をしてスープを飲んでるんです。 本当の貴方らしい笑顔。」
「ッ・・・」

ラブソディの言った事にテュードは少々動揺しつつ、スープを飲み干した。

「なんだかよくわからないが危険だな、お前は。 少し気分が悪い。」

席を離れ、テュードはサングラスを取った。

「消えろ。」

テュードは目を開けつつそう言った。
すると、目から眼光が飛びラブソディを襲った。

「キャッ！！」

ラブソディは顔を隠すように両手を前に出した。
すると眼光はラブソディの腕に命中し石化する、はずだった。

「！！ なにっ？」
「・・・？」

テュードは目の前の光景に目を疑った。
ラブソディの手に確かに眼光は命中し、石化が進みラブソディは石になるはずだった。
だが石化は命中した部分しかなっておらず、しかも

「ビックリした・・・」

ラブソディが石化した部分を手で払うと、砂のように消えてしまったのだ。

「石化しない！？ 何故だ！！」

テュードは裸眼のままの姿でラブソディに言った。

「ええっと・・・ 自分は貴方のマスターだからですよ、フォーティテュード・ザ・サーペントさん。」

「!!!? 名前まで知ってるのか、お前は・・・」

テュードは動揺を隠しきれず、その場に飛んでいた。

「チッ、眼光が聞かない奴がいたなんてな・・・ だがまだ策はある。」

テュードはそう言うと、サングラスをしてカフェの入り口へと向かった。

「お前はココから出られない。 せいぜい外の世界の住人達が消える光景を見届けるんだな。」

「テュードさん！ 貴方は！！」

ラブソディの言った事を聞かず、テュードは外に出て扉に魔法をかけた。

「ッ！ 開かない！！」

「・・・ さよならだ。」

テュードはそう言うと、翼を広げ飛んでいってしまった。

「待って！！ テュードさん！！」

ラブソディは店内から大声でテュードに声をかけたが、テュードは耳を貸そうとはしなかった。

『テュードさん・・・』

ラブソディはテュードが飛んで行った方向をずっと見ていた。

すると、

「マスター！！」

別の方から海を泳いできたピスフリーの姿が見えた。

「ピスフリーさん！」

「アルドールが行方不明って！！ 開かない！？」

ピスフリーはカフェの入り口を開けつつ自体の説明をしようとしたが、開かない事に驚いていた。

「もうすでにココは襲われました。 扉は開きません・・・」

「クソッ！ 遅かったか・・・」

ピスフリーはそう言いつつ、舌打ちした。

「お願いします！ 彼、テュードさんの心を晴らしてあげてください！！ アルドールさんもきっとテュードさんの所にいます！」

「テュード？ アルドールがそこにいるのか！？」

ラブソディが言った事の後者にピスフリーは引かれつつ言った。

ピスフリーが言った事に、ラブソディは頷いた。

「どこにいるかわかるか？」

「分かりません。 でも、彼の眼光を浴びると石化してしまいます。 どうか気をつけてください。」

「ああ、わかった。 無事でいてくれマスター」

ラブソディからの情報を受け、ピスフリーは急いで島へと戻って行った。

『テュードさん・・・ どうか過ちだと気づいてください・・・』

ラブソディはそう願いつつ、店に誰も入らないよう看板を閉店に変え、カーテンを閉めた。

トロピカルアイランド

ワープゾーンを抜けトロピカルアイランドへとやってきたストレンジャー。
島へと降り立つと、コレージがいると思われる前住居へ向かって行った。

『コレージ、今いるかな。』

ストレンジャーはそう思いつつ、桜の木が近くに生えた小屋へとやってきた。
小屋の前へと行くと、扉をノックした。

コンコンッ

「コレージ、いるか？」

ストレンジャーはコレージに声をかけるように言った。
だが返事が無かった。

『いないのか？』

ストレンジャーは扉を開け、中を見た。
だがそこにはコレージの姿は無く、小屋はもぬけの殻だった。

『出かけてるのか・・・ とりあえず島にはアルドールもいなそうだし、島へ戻るか。』

ストレンジャーは外へと出ると、目の前にワープゾーンを開き、島へと戻って行った。

テトラクリスタルアイランド東 砂浜エリア

「よし、お掃除終了ですね。」

一方こちらはストレンジャーの家がある島の東側、砂浜エリア。
ビリーブは1人家の窓を拭いており、たった今掃除を終えた所だった。

『・・・それにしても、今日はやけに静かですね。』

ビリーブは雑巾を片手に辺りを見渡しつつ、少し不気味に思った。
今日は朝からストレンジャーとストレンジャーの母親以外は見かけておらず、掃除のために1、2時間外に出ていたにもかかわらず誰の姿も見えていないのだ。

『ストレンジャーさんが戻るまで、とりあえず家にいた方がいいですよ。 無闇に移動すると危ない気がします・・・』

ビリーブは少し早歩きで家へと入り、外に誰もいないことを確認すると扉を閉めた。

「さてと、掃除が終わったから・・・ あ、もうお昼時ですね。」

ビリーブは部屋の棚の上に載った時計を見つつそう言った。

「じゃあお昼ご飯を作ろっと。 何がいいかな・・・」

先ほどまで使用していた雑巾を洗面所のカゴの中へと入れ、ビリーブはキッチンへと向かって行った。

火の元周りに何も置いて無いことを確認すると、冷蔵庫を開け材料を見た。

「ええっと・・・ あ、卵とうどんがありますね。 じゃあ焼きうどんにしよっと。」

冷蔵庫から卵と袋に入ったうどんを取り出し、扉を閉めた。

ビリーブが料理を始めようとする、

バンッ！！

「ストレンジャー！！ いる！？」

不意に部屋の入り口から音がし、誰かが入ってきた。

「ん？ ジョイさん、どうかしたんですか？」

リビングへ戻ると、そこにはジョイが息切れしつつ立っていた。

「ビリーブ・・・ ストレンジャー、帰ってきてる？」

ジョイはそのままの状態で用件を話した。

「ストレンジャーさんなら、朝からまだ戻ってませんよ。」

「そう・・・」

「ん？ ジョイ、もう来てたのか。」

2人がリビングで話をしていると、そこにピスフリーがやってきた。

だが先ほどまで海を泳いでいたためか、少し体が濡れていた。

「2人とも今日は普通ではありませんね。何かあったんですか？」

そんな2人を見て、ビリーブは推測しつつ言った。

「敵が、近くにいるんだ。」

「プレスル達が、石になっちゃったの・・・」

「何ですって！？」

「何だって！？」

ピスフリーとジョイはほぼ同時に用件をいい、それに大声で質問を聞きなおしていた。

「敵ですか・・・ でも石って。」

「プレスルが、さっき石になっちゃったの・・・ ティザー達もやられたって・・・」

ジョイはその場に崩れ、泣き出してしまった。

「誰の仕業なんですか？」

「プレスルが言ってたわ。 空色の翼を生やした蛇だって。」

「空色の蛇？」

ビリーブの問いかけにジョイは答えると、ピスフリー達は考えた。

「石になる魔法なんて、聞いた事無いな・・・」

「どうやって他者を石に変えるのでしょうか。」

「奴の眼光を浴びると、石になるみたいだぜ。」

3人は話をしていると、入り口から声がした。

「ホープ。」

「さっき城を見てきた。 アリス様達はいなくなっていたが、ティザーがメッセージを残しておいてくれたんだ。」

ホープは先ほどの答えの前に、知った方法を話した。

「メッセージを？」

「ああ。 眼から放つ眼光を浴びると、他者を石に変える技。 だが敵は単体、その蛇1人だ。」

「1人でそんな事をするなんて、相当な力の持ち主ね・・・」

ジョイはいつの間にか泣き止んでおり、ホープからの情報を聞き考えていた。

「じゃあ、朝からこの辺りが静かなのって・・・」

「もう、石に。」

「変えられた。 そう言う意味だ。」

ビリーブが言った事を、後方で答える声がした。

「コレージ！！ ブラベリー！！」

「もう、石に変えられていたんですね・・・」

「各家に石造が置かれていた。その石達は全て、ここの住人だ。」

「周り、静か。動くの、僕達、だけ。」

「ここらで石になってないのは俺らだけって事か・・・」

「そういう事だ。」

ピスフリーの言った事にコレージは答えつつ、階段を下りた。

「・・・そういえばピスフリー マスターは。」

「マスターの所はすでに先手を打たれた。カフェに入ることが出来ない。」

ピスフリーは悔やみつつそう答えた。

「マスターは、無事でしたか？」

「それは大丈夫だ。俺が行った時、入り口で無事を確認した。」

「よかった・・・」

ビリーブからの質問にピスフリーが答えると、周りで安息が漏れた。

「多分マスターにアイツの技が聞かなかったから、こういう手段に出たんだろ。」

「おそろくな。」

「そしてその事に感付いたお前らを、俺は野放しにしないとも言えるけどなあ。」

「！！！」

不意に家の入り口から声がし、ビリーブ達の視線が入り口に向けられた。

そこには家の扉の淵に寄りかかっているテュードの姿があった。

「空色の翼を持った、蛇！！」

「貴様がテュードか！！」

「名前まで知られているとは、なおの事お前らを放置するわけには行かないな。」

ピスフリーからの問いかけにテュードはそう言いつつ、怪しい笑みを溢した。

「貴方の攻撃手段はこちらは把握済みよ。 人数的にもこちらが有利。」

「マスターに作られた俺らは、ここらの奴らとは一味違うぜ。」

「・・・確かにお前は、ここらの存在に比べて気配が違うな。 こちらの勝率も確かに低い、
だが。」

テュードはそう言いつつ、サングラスを外し眼光を飛ばした。

「！！」

「俺の眼光から逃れられる奴は、そうそういないんだよ。」

眼光を飛ばし終わると、石化したビリーブ達を見つつそう言った。

テュードの目の前には、ほんの数秒前に取った行動をそのまま停止させたかのように止まっているビリーブ達が、石化して立っていた。

だが1つ、石が足りない。

「例外もいるというわけか。 素早いな、オセ。」

テュードはビリーブ達の方を見つつ、後ろにいるコレージに向かって言った。

「クッ・・・ もうバレちゃったか、気配を消したつもりだったんだけどな・・・」

「石数を数えれば簡単だ、それに室内なら逃げ道は1つ、俺の後ろだ。」

「さあ・・・ あいつ等を元に戻してもらおうか・・・」

コレージは両手に剣を構えつつ、テュードに言った。

「数秒遅かったな、避けるのが。」

テュードはそのままの状態のコレージに言った。

コレージの尻尾は石化しており、段々と侵食していた。

「このまま俺が振り返り石に変えるより、お前の剣が俺に触れるほうが早いな。 距離的にも行動速度的にも。 だがメリットがある。」

「ああ・・・ お前が何もしなかったら・・・ 俺は時期に石になる・・・ 殺して元に戻る保証

も無い・・・ 不利なのはむしろこっち・・・」

「そう言う意味だ。」

テュードはそう言うと、サングラスをしビリーブ達の元へ

「まあせっかくだ、お前はそのままにしておいてやるよ。 あのトカゲと同じようにな。」

「プレスルか・・・」

コレージがそう呟くと、石化したビリーブ達をテュードは抱えた。

「何処へ行く気だ・・・」

「さあな。 今夜俺は儀式を行い、石化した奴らを全員殺す。 それだけは言うておこうか。 お前には残りの奴らにでもその事を伝えるんだな、こちらから出向く必要性も無くなるわけだからなあ。 おっと、1人持てないか。」

「クッ・・・」

テュードはビリーブ達を回収しつつ、持てるだけの石造を回収した。

「さて、俺は戻らせてもらう。 石になった頃、回収しに来てやるからな。」

テュードはそう言うと、石になったビリーブ達を抱えこの場を去って行った。

コレージはその場に取り残され、動かなくなった下半身の状態でその場に立っていた。

「・・・もういいぜ、ブラベリー」

「・・・」

コレージはそう言うと、階段付近で石化していたブラベリーが普段の状態に戻った。

「お前にはやっぱり聞かなかったな・・・ あの技は・・・」

「石造石化、無効。 コレージ・・・」

「心配すんな・・・ 俺は確かに石になるが、死にはしない・・・ お前はストレンジャー達にこの事を伝えてくれ・・・ それにお前なら、アイツと物理で戦える・・・」

コレージは動かなくなる体の感触を感じつつ、ブラベリーに言った。

「・・・」

「後は・・・頼むぜ・・・」

そう言うと、コレージはその場で石になってしまい、動かなくなってしまった。

「コレー、ジ・・・」

ブラベリーはその場に立ったまま涙を流し、コレージの顔に触れた。

自分と同じように石になってしまい、コレージの肌は冷たくなってしまっていた。

ブラベリーはそんなコレージを入り口から少しずらし、風の当たらない場所へと移動した。

「・・・必ず、助ける。」

コレージに向かってブラベリーはそう言うと、外へと出た。

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

行方不明となってしまったアルドール。 石化してしまい、連れ去られたピスフリー達。ブラベリーはそんな仲間の事と想いを心に秘め、敵に見つからないうちに東エリアを離れた。そしてその足で向かった場所、それはストレンジャーがよく出かける際に来る、泉の庭園だった。

『ストレンジャー・・・』

ブラベリーは木陰に隠れ、ストレンジャーの帰りを待った。すると、泉周辺に光が集まりだし、ワープホールが作られた。その光の中から、ストレンジャーの姿が

「ストレンジャー」

「ん？ ブラベリー？」

ストレンジャーは島に着地すると、ブラベリーの声を聞き、声のした方を見た。

「ブラベリー、皆が何処にいるか知らないか？ あと、アルドールも。」

ブラベリーの近くへ移動し、ストレンジャーは先ほどから探しているアルドール達の事を伝えた。

「・・・皆、石。」

「何だって？」

ブラベリーが言った事に耳を疑いつつ、ストレンジャーは聞きなおした。

「皆、石。 何処か、連れ去った・・・」

「皆が石になった！？ どういう意味なんだ？」

「空色、蛇、眼光、石化。 名前、テュード。」

ストレンジャーは話し下手なブラベリーから多くの言葉を聞き、どういう意味なのかを考え、推測した。

「つまりテュードって言う蛇が、皆を石にして何処かへ連れて行ったって訳か？」

ストレンジャーはブラベリーからの言葉を聞き終えると、先ほど立てた推測をブラベリーに話した。

ブラベリーはその答えに、頷いた。

「急がないとヤバイな、マスターのところに行けばわかる」

「マスター、敵、先手、塞がれてる。」

「・・・って、今回は甘くは無いのか。 テュードって奴、中々手のだしが早いな・・・」

ストレンジャーが言おうとした事にブラベリーはそう言うと、ストレンジャーは納得した。

「とにかくやられて無く、動けるのは俺らだけか・・・ 強敵に勝てるか・・・」

「やるしか無いだろ？ マスターが動けないんならさ。」

ストレンジャーがそう言うと、空から声がした。

「プロミス。」

「プロミスも無事だったのか、何処にいたんだ？」

「遠出だ。 アリス様に頼まれた使いをな、ホープ達より帰るのが遅くなったんだ。」

プロミスは先ほどまで自分がとっていた行動を、ストレンジャー達に伝えた。

「ホープ、石化。 ホネスティ、不明。」

「ホープはやられたが、ホネスティの事は分からない。 一緒に居なかったって事は、無事と考えてもいいだろ。」

「そう祈るしかないな。」

ブラベリーの言った事を聞きつつプロミスはそう言った。

「とりあえず奴の行動手段は俺も大体知ってる。 ブラベリーは俺よりも知ってるんだろ？」

「・・・うん。」

「じゃあ何とかなるかもな、こっちは数が多いけど少ないが、ストレンジャーがいる。何とかなるさ。」

「俺がいるだけで変わるかは分からないが、出来る限り頑張るぜ。」

「頼むぜ。」

プロミスが言った事にブラベリーは頷き、ストレンジャーは賛同した。

「残ってるのは俺、ストレンジャー、ブラベリー、ホネスティ、後は黄龍だな。」

「グロウ？」

「最近地に戻ったんだろ、姿を見て無いからな。」

「・・・」 『グロウ、来てくれ・・・』

プロミスが言った事を聞き、ストレンジャーは心の中でそう言った。

すると、蛍が地面から飛び出し、空に集まり光を放った。

「ストレンジャー・・・ 皆が・・・」

グロウは本来の姿で召喚されると、少し涙ぐみながらストレンジャーに言った。

「大体は知ってる。 グロウ、場所はわかるか？」

「この島から少し飛んだ場所にある、忘れられた灯台にいるよ。 ホネスティもそこにいる。」

グロウは涙をぬぐい、質問に答えた。

「先に言ってるんだな。 なら俺らも加勢しに行くぜ。」

「僕も協力するよ、体が大きいから先にやられちゃうと思うけど、その灯台まで僕が送る。 皆を守るよ。」

「そんな危険な事」

「今の僕にはソレしか出来ないんだ。 それに今は前と違って戦える。 それにストレンジャー達なら、何とか出来るでしょ。」

「・・・」

グロウの言った事にストレンジャーは口を挟もうとしたが、グロウは笑顔でそう言った。
ストレンジャーはそんなグロウの笑顔に、何も言う事が出来なかった。

「わかった。 必ず俺らで何とかする、グロウも一緒に戦おう。」
「うん！！」

ストレンジャーがそう言うと、グロウは嬉しそうにそう言った。

「じゃあ、早く乗って。 早くしないと夜になっちゃう。」
「ああ。 頼むぜ。」

グロウの背中にストレンジャー達は乗り、そう言った。

「グロウ、お願い。」
「行くよ！！」

グロウはそう言うと、大きな翼を羽ばたかせつつ黄昏時の空へと飛び出し、目的地に向かって飛んで行った。

フォーゲットライトハウス 展望台

『もうすぐ、夜・・・』

灯台の最上階にある展望台の窓から、テュードは沈んでいく太陽を見ていた。
テュードの背後には石化させたアルドール達が配置されており、まるでオブジェのように綺麗に配置されていた。

そんなアルドール達の中央には、テュードが使用していた大鎌が置かれていた。

『あの時の憎しみから、もう時期解き放たれる・・・ この時をずっと待ってたんだ・・・』

テュードは付けていたサングラスを外し、裸眼で放つ光が無くなった太陽を見た。

その瞳は赤く、死人を思わせるような瞳をしており、光が無かった。
体には多数の傷があり、翼には切られた跡があり、穴が開いていた。
そしてアルドール達の中央に置かれ、大天使だった事を物語るような十字架付きの大鎌。
テュードは死人であり、朽ちた天使『墮天使』の1人だったのだ。

天使や神々の暮らす神の国。

テトラクリスタルアイランド周辺の空、雲のもっと上にそんな国が存在していた。
そこには天使や神と呼ばれる偉い存在達が暮らしており、下界に住む存在達を見守り、奇跡を与えていた。
テュードはそんな神達の暮らす世界に生まれ、『サマエル』としてその国での生活をしていた。

体は透き通った空色をしており、眼は綺麗な真紅の瞳をしていた。
普段のテュードはサングラスをしておらず、普段持ち歩いているのは綺麗な色をした十字架だった。
生まれた時には両親は折らず、1人の天使の元で育てられていた。
その天使とは、時期にイノセントの母親となるガブリエルだったのだ。
その十字架を振ると、下界に奇跡をもたらすのだ。

テュードはそんな奇跡を下界の存在達に与える事を誇りに思っており、とても嬉しそうに仕事をしていた。
小さい頃の天使や神達の子供は修行をするのだが、テュードはそんな修行等の必要無く、その時から立派に修行していた。
力は生まれた時から備わっており、回りからは生来立派な大天使になると噂されていた。
テュードはその事を確信しており、とても嬉しそうだった。

だが、その平和は長くは続かなかった・・・

それは、テュードが生まれてから約6年近くしたある日の事・・・
神達が集まる神殿で1つの事が議題に上がり、長く話し合われていた。
普段の議題等で長く話すといっても一日程度だったが、今回は約1週間近くも話し合われていた。
その議題の内容とは、

『「サマエル」フォーティテュード・ザ・サーペントの今後について』だった。

テュードは生まれながらの才能で修行は免除、その時から立派に仕事をこなしていた。

辺りからも評判は良く、とても素直で優しい蛇だった。

育て親として任命されたガブリエルは、我が子の様に接し、愛情を注いでいた。

テュードもその思いをたくさん貰い、そんな優しい存在になったとも言える。

だがその反面、最近になって異例が続々と神殿の報告部に送られてきていたのだ。

その内容はほぼ全てテュードに関係した事であり、奇跡を与えた後の報告書でもあった。

テュードの力によって奇跡を与えられた存在達は幸せに暮らしており、テュードはその事を確認した後に、別の存在に奇跡を与えていた。

だがその奇跡を貰った存在達に、時期に行き過ぎた幸せの感情と行動が見られていたのだ。

幸せに暮らすその反面、世界で保たれていたバランスが崩れていたのだ。

奇跡を与えた場所で幸せになると、回りにも影響が出る。

その影響はほんの少しで、余った幸せを分け与えると言っても過言ではなかった。

だがテュードの場合、その余った幸せの連鎖が永遠と続くのだ。

幸せになった人の身近の人が幸せになり、その人のまた身近な人が幸せになる。そしてまた幸せになる・・・

その繰り返しが行われており、テュードが与えた幸せを先に受け取った存在達が幸せそのものを分からなくなってしまう自体が続々と発覚し始めたのだ。

テュードはそんな不幸な存在に再びそれ以上の幸せを与えると、存在が再び幸せになる。だがまた分からなくなる。

そうして続けられた幸せが段々と不幸になる行動へと結びついてしまい、下界の存在達が幸せになるどころか、むしろ不幸になってしまっていたのだ。

その報告が神殿に連続で来る枚数が日に日に増え、山になってしまうほどの報告書が舞い込んできたのだ。

そしてその事に対して議題が上がり、話し合う結果となってしまったのだ。

長時間に及んで話し合われた神殿内の上級天使達が下した判決。 それは

「最近生まれたサマエル『フォーティテュード・ザ・サーペント』をこの国から追放する。」

その判決は、テュードを幸せの絶頂から心と体に大きな傷を残す、最悪な事件の幕開けだったのだ・・・

血の悲劇と墮天使の誕生

神殿内での判決が下された後の事。

テュードの家では、いつもと変わらない平和な時がまだ送られていた。

「フォーティちゃん、いる？」

テュードの育て親であるガブリエルは、自室にいたテュードに対して声をかけた。

「なあに？ お母さん。」

「ちょっと神殿にお声をかけられたの。これから出かけてくるから、留守番しててもらえるかな？」

「うん！ いい子でココにいるね！」

「偉いわ。じゃあお願いね。」

ガブリエルはそう言うと、テュードの頭を優しく撫で、外へと出て行った。

テュードはそんなガブリエルを外まで見送ると、玄関を閉め、再び自室へと戻って行った。

自室へ戻ると、テュードは仕事で使用している十字架を手に取り、家にあった布地で手入れを始めた。

毎日仕事が終わると、テュードは部屋に戻っては布で優しく十字架を拭き、明日の奇跡へ向けて真面目に過ごしていた。

それが逆に過ちになるとは、その時誰も思っていなかっただろう。

育て親のガブリエルが出て行って数十分後・・・

「Z Z Z z z z・・・」

いつの間にかテュードは自室のベッドに寝ており、寝息を立てていた。

その日の仕事に疲れてしまっている様子でもあったのか、可愛い寝顔をしていた。

バンッ！！

だがその安眠を妨害するかのよう、外で物音がした。

「フォーティちゃん！！ 起きて！！」

「う、うん・・・？ お母さん、どうしたのお？」

テュードはまだ眠いのか、眼を擦りつつ慌てた様子のガブリエルを見た。

「今すぐココから逃げて！！ 貴方を殺そうと国中の人達が刃を向けてくるわ！！」

「ほえ？ どういう事お??」

「いたぞ！！」

「！！」

ガブリエルの言った事に頭の中で整理しきれない状態のテュードを尻目に、育て親のガブリエルの後方から声がした。

寝ぼけたテュードをガブリエルは入ってきた天使達に見えないように抱え、自室の奥の窓辺へと移動した。

「蛇が一緒だ！！」

「さあガブリエル、その子を渡してもらいましょうか。」

「ダメよ！！ この子は何も悪い事はして無いわ。 殺す理由なんて無いはずよ！！」

『殺す??・・・』

テュードは殺気立った天使達の声聞きつつ、そう思った。

「もうすでにその蛇の奇跡の報告書は来ている。 言い逃れは出来ない！」

「無駄な抵抗は止めなさい。 貴方まで罪に問われますよ？」

「それでも構わないわ、私はこの子の母親よ！！」

ガブリエルはそう言うと、純白の翼を出し、部屋の窓を開け空へと飛び出した。

「逃げたぞ！！ 追え！！」

テュードはガブリエルに抱かれた状態で外へと運び出され、ガブリエルの後方から声がした。

「・・・お母さん。」

「大丈夫、貴方は私が守ってあげるわ。」

心配するテュードに声をかけ、ガブリエルは追っ手に見つかりにくいと思われる入道雲の中へと入っていった。

入道雲の中に入ると、辺りの視界が一気に悪くなり、前が見えない状態になった。

テュードは抱かれたまま雲の中を進み、追っ手に見つからない場所へと向かっていた。

「・・・ココまで来れば、当分見つからないわ。」

ガブリエルはテュードを足場のある雲の上へと下ろし、そう言った。

「お母さん。 僕、何か悪い事しちゃったの？」

テュードはさっき別の天使や神達が言っていた事を気にしており、問いかけた。

「大丈夫、貴方は何も悪い事はしてないわ。 貴方はやるべき事をやった。 悪い事なんて何一つしてない。」

「じゃあなんで、皆は僕の事を殺そうとするの？」

テュードからの質問にガブリエルは困りつつ、黙っていた。

「とりあえず、ココにいたら貴方は殺されてしまうわ。 下界へ降りて、貴方は普通の蛇として暮らして。」

「お母さんはどうするの？」

「私も一緒に行くわ。 貴方を1人にはしない、一緒に下へ行きましょう。」

ガブリエルはテュードの頬に触れつつ、そう言った。

「うん。 お母さんが一緒なら、僕降りるね。」

「偉いわ。」

テュードは笑顔で答えると、ガブリエルは嬉しそうにそう言った。

「そうはさせませんよ。」

グサッ！

「ッ！！」

2人が束の間の一瞬を過ごしていると、ガブリエルの後方から声がし、何かが刺さる音がした。

「！ お母さん！！」

「・・・大丈夫よ・・・ フォーティちゃん・・・」

ガブリエルは心配するテュードに作り笑顔を見せ、安心させようとした。

「この程度ではやられませんか。 まあ当たり前ですね。」

「フォーティちゃん、逃げて・・・」

バタッ！

ガブリエルはそう言うと、前のめりにその場に崩れた。

「お母さん！！」

「逃げ・・・て・・・」

テュードは倒れたガブリエルの下へ行き、安否を確認した。

だが流れる血の量が多く、動かす事は無理だった。

「さあ、次は貴方の番ですよ。 リトルサマエル。」

「！！」

テュードは自分に刃を向ける天使を見て、全速力で逃げ出した。

『・・・無駄な事を。』

ポフッ

テュードは入道雲から外へと出ると、すでに外は包囲されており、逃げ道は無かった。

「！！」

「・・・さあ、これで鬼ごっこはおしまいですよ。」

数秒遅れて、先ほどの天使が入道雲から出てきた。

テュードにはもう逃げる場所はなく、何もする事が出来なかった。

目の前には刃を光らせる神達。 上空には弓を構える天使達。

その場にいる全員がテュードを睨んでおり、敵意をむき出しにしていた。

「・・・ッ！ お母さん！！」

テュードは怖くなりその場へ座り込み、先ほどのガブリエルを呼んだ。

だがすでにやられた事をテュードは知っており、守ってくれる人もいない。

見方は誰もいない。 自分を殺そうとする人物は目の前にいる。

絶望がテュードの純粋な心を支配し、涙を流させた。

「殺れ。」

後方から声がすると、テュードの体に一気に痛みが走った。

翼に矢が刺さり、肌を剣で切られ、顔に槍を突き刺され、流れ出る血で視界が赤く染まった。

そして、胸に大きな激痛が走り、テュードはその場に崩れた。

すると足場だった雲が段々と薄くなり、テュードは雲の下へと落とされた。

落下している間も、テュードの体には痛みが走り続け、その痛みから解放される事は無かった。目の前は赤かった視界が段々と暗くなり、色という色が消え、光を失った。落下し続けたテュードはしばらくすると不気味な液体の中に落下し、全身が溶ける感覚がした。

「・・・お母さん・・・」

テュードは暗くなった視界の中でそう呟き、涙を流した。そして、意識が遠くなった。

しばらくして気が付き、テュードはいつの間にか海の上に突き出た岩の上に横になっていた。目の前は相変わらず暗く、だが少し色が戻っていた。

「お母さん！！」

テュードは辺りを見回し、ガブリエルの姿を探した。自分と同じく殺されてしまったなら、辺りにいるとテュードは思ったのだ。だがいくら周りを見渡しても誰もおらず、回りには暗い空と海が広がっていた。

「・・・お母さん！！」

テュードはもう一度ガブリエルの事を大声で呼び、探した。だが、いくら探しても探しても誰も見つからず、テュードは一人ぼっちだった。

「・・・一緒にいるって、言ったのに・・・」

テュードは顔を俯かせ、呟くようにそう言った。自然と眼からは涙が流れ、自分の肌の上に落ちた。

「もう・・・誰も信用出来ない・・・周りは皆敵だらけ・・・」

テュードは不気味な笑顔でそう言い、その場に飛んだ。

「・・・皆消えちゃえばいいんだ・・・そうすれば、もう僕の事を殺そうとする人なんていない・・・裏切りなんて関係無い・・・」

眩くようにそう言うと、持っていた十字架に柄と刃が生え出し、鎌のような形に段々と変化していった。

「この世に生きる全ての存在を、消しちゃうんだあ！！」

テュードは持っていた鎌を大きく振りかぶり、海に突き刺した。
すると、刺した場所から段々と海が消えだし、回りには何も無くなった。

「アハ、アハハハハ！！！！もう僕を止めることなんて出来ない！　僕は全存在を消してあげるんだあ！！」

テュードはそう言うと、翼を大きく広げ、空へと向かって飛んで行った。

空に向かって飛んでいくと、時期にテュードは地上へと飛び出た。

そして近くの島へと飛んで行き、テュードは無差別にその島にいた住人達を殺して行った。

もちろん抵抗する存在もいたが、今の彼から逃げられる人物は折らず、全員がテュードの前に崩れ、肉片となっていった。

その島にいた存在達を全て殺し終わると、テュードは空を飛びまわり、別の島も襲った。

襲い、殺し、島の大地を赤く染める。

テュードはそんな繰り返しの残虐な殺しを素直に楽しんでおり、無邪気な笑顔をして鎌を振りまわした。

光を失った眼から飛び出す眼光は相手を石化させ、テュードは持っていた鎌でそんな石になった存在達を砕いて行った。

復活して飛び廻った周辺の島にいた存在達は全て消え去り、時期に無人島と化していったのだ。

そして、今のテュードはというと、

散々殺して廻ったおかげか、体力と使い果たし、休憩場所として見つけた灯台に住んでいた。

廃墟と化した灯台には誰も近寄らず、テュードにとって住み心地の良い場所だった。

一時期近くのを襲う集団がそこを通ったが、テュードは手を出さなかった。

石化は全ての存在に適用されてしまい、食物も石になってしまうため、テュードは力を使い、サングラスを作った。

朽ちた天使となった今では、サングラスは墮天使を象徴するかのような代物と化していた。

自分と同じフロアにいる石達は、時期に登る月が灯台を明るく照らしたあと、破壊する予定だった。

この儀式を行えば、自分がわざわざ歩いて殺さなくても、勝手に存在達は消えるからだ。

そうすればテュードが長年叶えようとしていた願いがその時叶えられ、テュードは世界で1人になるのだ。

孤独で寂しい。 だが自分を傷つける存在がいない優しい世界。

『もうすぐ、願いが叶うんだ・・・』

テュードの描く世界になるまで、もう少し。 テュードはそう悟った。

紅い月明かりの元

フォーゲットライトハウス

『・・・ココね。』

テュードのいる展望台の外側で、1つの影があった。

綺麗な羽に大きな茶色の尻尾。　ホネスティだった。

ホネスティは1人海の潮風を浴びつつ、展望台内で1人月を見ているテュードを監視していた。

ホープと別れたホネスティは、相手の本拠地を探していた。

思い当たる場所は全て散策し、手当たり次第何か痕跡が残っていないかと探していたのだ。

だがいい情報は見つからず、城へと引き返そうとした時の事。

『・・・え！？』

テトラクリスタルアイランド周辺を飛んでいたホネスティは、異様な光景を見た。

それは、東側エリアから何処かへ飛んで行くテュードの姿だった。

だがそれに驚いたのではなく、その人物が持っていた物に驚いていた。

『ホープ！！　嘘でしょ！？』

ホネスティは急いで近くの岩場に身を隠し、相手を見ていた。

テュードの手には、石になったピスフリー、ジョイ、ビリーブ。　そしてホープの姿があった。

4体の石を軽々と抱え、テュードは何処かへ向かって飛んで行った。

『追いかけなきゃっ・・・』

ホネスティは相手に気配を察しされないよう距離を保ちつつ、後を追って行った。

だが途中、テュードの姿を見失ってしまった。

ホネスティはしばらく空中で右往左往していると、とある建物を見つけた。

それがココ、フォーゲットライトハウスだった。

中にはテュードの姿は無かったものの、ある物でココが本拠地となる決定的な証拠を見つけた。

それは、石になったチェリー、プレスル、ティザー。そしてホープ達を見つけたことだ。部屋に入らず外で監視をしていると、時期にテュードが帰ってきた。その手には、コレージの姿が。

そして今にいたり、ホネスティは考えていた。

『コレでアタシが住んでる周辺のほとんどの存在が石にされてしまったってことね。知っている限りで、無い石造は全部で6体。急いで皆に知らせないと・・・』

「何処へ行くのかな？ 可愛い妖精さん。」

ホネスティがその場を離れようとした時、後方から声がした。そこには翼を広げ、ホネスティを見ているテュードの姿が。

「ッ！！」

ホネスティは急いで上空へ移動し、逃げようとした。だが、

「おっと。」

ガシッ！

テュードはホネスティ以上に素早く移動し、その手を掴んだ。

「逃がすわけにはいかないな。纏まって来る敵は少ない方がいいんでね。お前も石になってもらおうか。」

「だったら、証拠を残すまでよ！！」

ホネスティは逃げる事を止め、手にスティックを召喚し、上空に魔法を放った。

「・・・余計な事を！！」

「キャア！！」

テュードはそんな行為を逃すわけも無く、ホネスティも同様に石化させた。
ホネスティは魔法を放っている体制で石になり、テュードの腕の中に納まった。

「・・・チッ 忌々しい存在達だ！ 仲間なんか何がいい！！」

テュードは少し苛立ちつつ、石化したホネスティを持って灯台の中へと入っていった。

フォーゲットライトハウス周辺 海上

「あれは・・・」

「こんな時期に、花火？」

一方こちらは、グロウの背中に乗って移動するストレンジャー達
向かっている方向の上空に、綺麗な花火が一発上がったのだ。
火の粉の代わりに花が舞う、閃光弾が。

「あれ・・・ ホネスティが以前披露してた花火に似てる。」

「じゃあ、ホネスティがやったのか？」

「確信は無いが、今の状態から考えて、そうだと思う。」

プロミスは冷静に撃ちあがった花火を見つつ、そう言った。

「危険、行動・・・」

「派手な一発は、見つかったって事か・・・ そうなると、残りは俺らだけだな・・・」

「急がないとストレンジャー もう月が上がり始めてるよ。」

グロウがそう言うと、乗っていた3人は空を見た。

そこにはいつもと違う色を放つ、不気味な月の姿が。

「紅い、月・・・」

「テュードの奴、やっぱり何かをする気だな。」

「早く何とかしないと、アリス様達が危ない。」

プロミスは不愉快そうな顔をしつつ、少し焦っていた。

「皆、見えて来たよ！」

グロウは前方に建物を見つけ、3人の注意をうながした。

「あれは・・・ 灯台？」

「今は誰もいない灯台だよ。 この周辺で嫌な気が満ちてる。」

「！ ストレンジャー！ アレ！！」

ブラベリーは何かを見つけ、灯台の上を指差した。

そこには灯台の上に浮かぶ奇妙な影が。

「ようやくお出ましたな。・・・まあ頃合か。」

「テュード！！」

ストレンジャーはそこにいた人物の名前を呼んだ。

「さあて、ココで少しふるいに掛けさせてもらう。 朽ちろ！」

テュードはそう言うと、つけていたサングラスを外し、ストレンジャー達に鋭い眼光を放った。

「皆！ 飛んで！！」

グロウがそう言うと、ストレンジャー達は翼を羽ばたかせ個人で空を飛び出した。

眼光はストレンジャー達とグロウの間をすり抜け、海へと当たった。

「さあて、何処まで逃げられるかな？」

テュードは引き続き眼光を発射し、ターゲットに向かって連射した。

「当たってられるかって！」

「同じくな！」

ストレンジャー達は機敏な動きで全ての眼光を避け、灯台へと向かった。

プロミスも同様に避け、敵の本拠地へと向かう。

「・・・」

ブラベリーは相手に効かない事を察しられなれない様を目立たない様海上ギリギリを飛び、向かった。

「さて、遊びはココまでだ。 コレは避けられねえぜ！」

テュードはそう言うと、両手で目の前を隠し、収束させた眼光をストレンジャー達に向かって放った。

「なっ！！」

「避けられねえ！！」

「皆！」

避けるにも回避場所が見つからないストレンジャー達の元へ、ブラベリーは急いで向かった。だがその前に、1つの姿が視界に入った。

「僕が出来る事は、皆を守る事なんだから！！」

「グロウ！！」

グロウはテュードに背中を向けた体制で、ストレンジャーを守る体制で間に入った。

パシッ！

「ッ！！」

眼光はグロウに命中し、徐々に全身を石化させていく。

「グロウ！！」

「ゴメンね・・・ストレンジャー・・・ 後は、おね・・・がい・・・」

グロウはそう言うと、動かなくなった翼と共に海へと落下し、岩の上に墜落した。

「ッ！！ グローーウ！！！」

ストレンジャーは落ちたグロウを見て涙を流しつつ、叫んだ。

『ストレンジャー達なら・・・ 皆を元に戻せるよ・・・』

グロウは痛む体が徐々に動かなくなる体を感じつつ、そう思い、石になっていった。

「・・・クッ さすがに、やり過ぎたか・・・」

テュードは少し体を前のめりにし、苦しそうに呟いた。

『・・・だが、大物は倒した。 残りは3人だ・・・』

少し重い体を動かしつつ、テュードは中へと入っていった。

「・・・ストレンジャー」

空を飛びつつ涙を流すストレンジャーを見て、プロミスは声をかけた。

「・・・ゴメン。 皆が消えるような所を見ると、どうしても泣いてしまうんだ・・・」

ストレンジャーは手で涙を拭しつつ、そう言った。

「泣か、ないで・・・ 皆、待ってる。」

「ああ。 分かってる。」

ブラベリーからも慰めを受け、ストレンジャーは流した涙を全て拭った。

「・・・行こう。 皆のために。」

ストレンジャーがそう言うと、2人は頷き、灯台の中へと入って行った。

類似する想い

フォーゲットライトハウス 展望台

「ハア・・・ ハア・・・」

展望台に置かれたアルドール達の石造の中心で、テュードは少し息を乱し前のめりになっていた。

『蓄えていた力を一気に使うと、ココまで体に来るとは・・・』

先ほどの一戦で体力を大幅に消費し、テュードは疲れていた。

『でも、もうすぐ願いが叶うんだ・・・ ココで負けたら意味が無い・・・』

テュードは腕に力を込め、体を起こした。

自分の周りには石造と化したアルドール達が並び、それぞれが中央に向けて置かれていた。体制は石化する直前のものだが、全て自力で立つバランスでそれぞれが立っているため、横にして置く必要が無かった。

「俺は負けない・・・ 願いを叶えるために。」

テュードは手に大鎌を召喚し、この部屋へと向かってくるストレンジャー達を迎え撃つ体制を取り出した。

カツッ カツッ

「特にトラップは無さそうだな・・・」

「ああ、自力で俺達を倒せるだけの力があるって訳か・・・ やはり手ごわい相手だな。」

こちらは、灯台の入り口から進入したストレンジャー達。

最上階の展望台へと向かう方法は、入り口からは階段しかなく、螺旋状に作られた階段をゆっくり登っていた。

ストレンジャー達の手にはそれぞれが武器を手にしており、いつ奇襲が来てもいいよう体制を取ったまま行動していた。

特に奇襲も無く、3人は最上階へと到着した。

「いよいよだな。」

ストレンジャーは先に扉に手をかけ、プロミス達に合図をした。
後方で一時待機していたプロミスとブラベリーはその合図に頷き、いつ開けてもいい様な体制になっていた。

「行くぜ。」

ストレンジャーはゆっくりと両扉を引き、先に中へと入った。

「ようこそ、眼光を逃れし最後の存在達。」

テュードは入ってきたストレンジャーを見て、軽いお出迎えをした。

「テュード。俺達の仲間は。」

「俺とお前がいるこの部屋に、丁寧に飾らせてもらった。まあ見るがいいさ。」

「・・・」

ストレンジャーはテュードの事を意識しつつ、並べられた石造をチェックした。

扉の近くにいたのは、石になったピスフリーの姿だった。

その隣にアルドール。そして反対側にはジョイ、ビリーブ、コレージの順で次々と並べられていた。

所々、変な感覚が開いてる事にストレンジャーは気づいた。

「開いてるスペースは、俺ら3人の場所か。」

「やはり察しが良いな。何処と無くお前の雰囲気はその石造達とは違うと思ったが、そう言うことか。」

テュードはそういつつ、石化したチェリーの元へ向かった。

「随分と美しく石化してくれたもんだなあ。今まで壊してきた多数の石造達とは美しさが違う。壊すのが惜しまれるな。」

石化したチェリーの肌に触れつつ、不気味な笑みでテュードはそう言った。

「1つ聞かせてくれ。お前・・・テュードが俺らを石化させる理由を。」

「・・・何故お前に答える必要がある。」

「存在が行動を起こすには、必ず理由がある。些細な事でも、大きなことでも。」

ストレンジャーは少し強気な態度で前に一歩踏み出し、テュードに言った。

『瞳の色が違う。恐れはしているが、迎え撃つ体制ではあるわけか。』

テュードはそんなストレンジャーを見て、大体の様子を察した。

「まあいいか。この行動が最後になる今回くらいは・・・」

ストレンジャーからの質問を受け、テュードは石化したティザーの上に座った。

「俺は昔、同族達に殺された。今は半死人だな。」

「死人？」

「そうだ。」

テュードの言った事に、ストレンジャーは疑問に思った。

「俺が何をしたのはわからずじまいだったが、昔暮らしていた場所で俺は同族達に殺された。

この体に受けた傷は、その名残だ。」

「じゃあお前は、すでに死んでいる身。」

「そうだな。なぜ復活し、今生きているのかはわからないが、生きている事には変わりはないだろ。誰も見る事が出来ない俺の目には、もう光は無い。」

テュードはそういつつ、顔を少し横に向けた。

『・・・裏切りと、殺人・・・』

そんな展望台で行われているやりとりを、扉の前の入り口で待機しつつ聞いているプロミスは思った。

「そして俺がこの行動を行っている理由。 それは全世界の存在の消滅。」

「消滅!？」

「そうだ。 誰も他者の事を考えない。 平穏な顔で暮らし、平気で殺す様な奴らなんかに生きている資格は無い。 それを俺が行おうとしているわけだ。 お前だって、裏切りぐらいはあるだろ？」

テュードは細く笑みを浮かべつつ、ストレンジャーに言った。

「俺は他の存在を裏切った事何か1つも無い。 裏切られた事もだ。」

「随分と恵まれた生活をしているんだな。 ・・・だがその瞳はそんなやわな色を示していない。 強く生きている理由があるわけか・・・」

テュードはストレンジャーの事を上から下まで観察し、そう言った。

「・・・さて、そろそろ頃合だ。 お前と、その後方で待機している2人にも消えてもらうか。」

テュードはそう言うと、ティザーの上から下り、大鎌を構えた。

『チッ、やっぱりバレてたか・・・』

ストレンジャーは内心毒付つつ、剣を構えた。

「待て！」

「! プロミス！」

2人が行動を起こそうとしたその時、ストレンジャーの後方から声がした。
そこには仁王立ちしているプロミスと、扉の影に連れ戻そうとしたブラベリーの姿が。

「なんだ、まだ何か聞きたいことがあるのか。」

テュードは少し苛立ちつつ、プロミスに問いかけた。

「馬鹿な真似はよせ！ 後悔するのはお前の方だ！ テュード！！」

「何をいまさら。俺はそれを望んで行っているまでだ、お前に何がわかる。」

「わかるから言ってんだ！！」

プロミスはその場から走り、ストレンジャーの前まで飛び出してきた。
その後を、ブラベリーが少し迷いつつ付いていく。

「俺も捨てられた身だ・・・ お前と並ぶぐらい残虐な行為を心に受けた、1人の存在だ。」

「並ぶ・・・」

テュードは少し涙目のプロミスを見つつ、言った。

「捨てられ、裏切られ、一人で苦しみ、どんなに他者の事を消そうとしたか・・・ だが俺はその行為を途中で中断させられた。ある人に出会って、生まれ変わったから。」

「・・・」

「お前も会った事があるはずだ。灰色の毛をして、左目の上に傷を持つ狼(フェンリル)を。」

『・・・アイツか・・・』

テュードはプロミスの話を聞き、カフェで出会ったラプソディの事を思い出した。

「あの方に出会った時、俺もお前のような態度を取って拒絶していた。殺そうとした。・・・でも止めちまったんだ。あの方の優しさに心を撃たれて・・・」

「撃たれた・・・ね・・・」

「お前にも同じような過ちをして欲しくないんだ。たとえ相手が憎くても、消したいと願っても。全存在が共通じゃないんだという事をわかってほしいんだ！」

プロミスは少し長くなってしまった話の大元を、テュードに向かって叫んだ。

「・・・でも所詮は、その程度の恨みや憎しみだったんだろ。」

「ッ！ 何だって！」

テュードの言った事に反感し、プロミスは言った。

「止めたって事は、その程度の事だったという意味でもある。 所詮はもう一度作り直された存在という事だ。」

「お前！！ 何で分からないんだ！！」

「うるさい・・・ 失せろ！！」

テュードはそう言うと、つけていたサングラスを掴み取り、眼光を放った。

「！ プロミス！！」

そんな行動を見て、とっさにストレンジャーはプロミスの事を眼光から庇った。

「ッ！ ストレンジャー！！」

「！！」

パシッ！

プロミスはそんな行動に動けず、ストレンジャーに守られる体制で抱かれた。

そして、目の前で彼が石化して行った。

「ストレンジャー！！」

「！ プロミス、髪！」

「ッ！！」

ストレンジャーは全身を庇ったが、守りきれなかった髪の部分に眼光を喰らい、先端が石化していた。

「ッ！ 何でお前らは他者を庇う！！ そんな奴らなんかいらねえ
だろ！！！」

テュードは再び目の前で行われた行動を見て、思い切り叫んだ。

「入らなくなんか無いッ……！ こいつら皆！！」

プロミスは石化したストレンジャーをブラベリーへ渡し、テュードの方へと走った。

「俺の！！ 大切な存在だああ！！」

ドゴッ！！

そして、思い切りテュードの顔面を殴った。

バンッ！！

「クッ！！！」

テュードはその反動で吹き飛び、展望台のガラス窓に激突した。

殴られた反動でサングラスはプロミスの足元に落ち、テュードの口から少し血が滲んだ。

「何で分からねえんだ！！ 何で分かろうとしねえんだ！！ お前も傷つけられた身なら、俺と同じはずだろ！！！」

プロミスは再びテュードに接近し、両手で顔を掴んだ。

「心に傷を負ったからか！？ 体にも傷を負ったからか！？ だからなんだって言うてんだよ！！ 結局お前がやろうとしている事の先に待つことは、後悔しかねえんだよ！！！！」

「ッ！」

半分叫ぶ感じにプロミスは言い、涙を流した。

「貴様・・・ それでもサマエルか！！」

ゴンッ！

「ッ！！」

プロミスはそう言うと、テュードに頭突きをお見舞いした。

「もう暴力や、汚い行動でしか恨みや憎しみを晴らすしかないなんて考える奴なんて！！ 馬鹿なんだよ！！！！」

頭突きをした後か、少し視界がくらむ中、プロミスは最後の言葉を言い放った。

「クッ・・・ だから何だって言うんだよ！！ 他にどうしろって言うんだ！！」

テュードも負け時と体を少し起こしつつ、プロミスに反撃した。

こうなると、すでに口ケンカだ。

「お前なんかは何が分かる。 殺された気持ちや孤独に浸った、全身に痛みの走る激痛を、お前は感じたことがあるのかあ！！」

「あるに決まってるんだろ！！ 俺だって捨てら続ける孤独を知っている！ 全身に痛みの走る経験なんて朝飯前だ！！ なめんな貴様あ！！」

テュードとプロミスの頭にはすでに血が上っており、いつ殴り合いが始まってもおかしくない状態にあった。

ブラベリーはそんな2人の様子を少し離れた場所から見て、石化したストレンジャーを支えていた。

「・・・捨てられる、痛み。」

ブラベリーはそう呟くと、ストレンジャーをゆっくりと地面に置き、2人の元へと行った。

「孤独、憎しみ、悲しみ・・・ 耐え難い、激痛・・・ 分かる。」

ブラベリーは頑張っって説明出来るよう、たくさんの単語を言った。

「お前まで同じような事を言う気か・・・ 何が言いたい。」

「俺同様、ブラベリーも捨てられた存在だからだ。そして同じように、あの方に助けられた。」

「・・・」

プロミスはそう言いつつ、ブラベリーを引き寄せた。

「俺らの心にはそんな醜いものは残っていないなんていわない。たとえ創り直された、生まれ変わった存在だと言ったとしても、心は同じだからだ。」

「心は・・・ 同じ・・・」

「痛み、孤独、沢山・・・ でも、記憶、一緒。」

「だがたとえ生まれ変わったからと言っても、もう同じ過ちをしてはいけないんだ。そのためにマスターは、俺達を作り直してくれたんだ。」

プロミスとブラベリーからの説得に、テュードは黙る事しか出来なかった。

「・・・ だけど、僕はもう1人なんだ。周りに支えてくれる人なんていない・・・ 寂しいんだよ・・・ 苦しいんだよお・・・」

テュードは昔の時の言動を涙を流しつつ喋り、2人に言った。

バツ！

「?!？」

テュードが泣いていると、前から2つの鼓動が接近した。

「お前は1人じゃないぜ。」

「え・・・？」

「類似だけ、でも、仲間・・・ 家族・・・」

「かぞ、く？」

「そう、家族。」

プロミスとブラベリーはテュードを抱き締め、そう言った。

「もうお前は、1人じゃないぜ。 ココにいる皆が皆、お前の家族さ。」

「・・・でも。」

「大丈夫・・・ 皆、優しい。 皆、認める。 マスター、認める。」

「みんなあ・・・ えぐっ・・・」

2人にそう言われ、テュードは思い切り泣いた。

それから数分後・・・

「・・・大丈夫か？ 殴っちまったけど。」

「・・・ 平気。」

プロミスはテュードの手を引き、起き上がらせた。

ブラベリーは背中を支え、起きる手伝いをした。

「皆を、元に戻してくれないか。」

「・・・ 時期に元に戻る。 この儀式が失敗に終わった時、そうなるようになっている。」

「よかった・・・」

ブラベリーは一安心し、先ほど寝かせたストレンジャーの下へと駆けよった。

「・・・皆が戻る前に、1つお願い。」

「なんだ？」

不意にテュードは口を開き、プロミスに言った。

「さっきの事、こいつら皆に言わないでくれ。今から新しく始めたいんだ、性格等は変わらないと思うが。アレは昔の俺の終着点だ。」

「わかった。俺ら3人の秘密だな。」

テュードの言った事に了解し、プロミスは言った。

「多分始まったとしても、俺は皆と仲良くはならない。・・・でも、それでもいいだろ。そういう性格の人がいてもさ。」

「・・・いいぜ。じゃあ俺やブラベリーとも、前と同じだな。」

「ああ。」

テュードはそう言うと、展望台のバルコニーに出た。

しばらくすると、展望台の窓から月明かりが大量に差し込み始めた。

フワァッ・・・

すると、光を浴びたストレンジャー達の体が光り始め、徐々に色を取り戻し始めた。同様に、窓辺周辺に立っていたアルドール達にも色が出始め、元の姿に戻って行った。

「ストレンジャー！！」

「！ アリス様！！」

ブラベリーは元に戻ったストレンジャーを抱え、嬉しそうに見た。

「・・・ブラベリー」

「ストレンジャー・・・よかった。」

ブラベリーはそう言うと、ストレンジャーの手を強く握った。

「アリス様、大丈夫ですか・・・？」

「え・・・ええ。 大丈夫よ。」

意識を取り戻し、再び動き出したチェリーは、プロミスを見つつそう言った。

「う、うう・・・ん」

同様に、外で倒れていたグロウも目を覚まし、起き上がった。

「よかった。 また動けるようになったのね。」

「ったく、とんだ目にあっただぜ・・・」

ジョイは嬉しそうに言っている時、ピスフリーは毒づきつつそう言っていた。

「ストレンジャー、大丈夫か？」

「ああ、平気だ。」

中央で横になっていたストレンジャーを見て、コレージは心配そうに言った。
そんな声に、ストレンジャーは笑顔を作って返事をした。

「皆さんご無事で何よりです。」

ティザーは辺りの存在達を見て、安堵の様子を見せた。

「でも・・・ どうして元に戻ったのかしら・・・」

「プロミス、ブラベリー、知ってる？」

「テュードが直してくれた。」

「・・・」

ホネスティからの問いかけに、プロミスとブラベリーはそんな答えを出した。

「そうだ。 プロミス、ブラベリー テュードは何処行った！」

ピスフリーは指を鳴らしつつ、問いかけてきた。

「アイツに一発お見舞いしねえと気がすまねえつつうの。」

「テュードならもういない。 それに戻してくれたのはアイツだ。 止めてくれ。」

「そうよピスフリー たとえアイツがやったとしても、もう終わった事なんだから。」

プロミスとジョイはピスフリーをなだめる様に言った。

「そう言うことだ。 止めとけよピスフリー もう争う必要性は無くなったんだから。」

「・・・チッ ストレンジャーがそう言うなら、止めるしかないか・・・」

ピスフリーは手を下ろし、諦めるように言った。

「じゃあ皆さん、帰るべき場所へ帰りましょう。」

「そうだな。」

「もう夜だから寝なくっちゃ。」

そんな平和なやり取りをしつつ、ストレンジャー達は灯台を後にした。

「・・・ もう、1人じゃないのか・・・」

ストレンジャー達が去った後、灯台の屋根の上に座って月を眺めているテュードはそう呟いた。

サングラスは先ほどのやり取りの後に回収し、今は手に持っていた。

なので、光の無い裸眼で月を見ている状態だ。

『なんであの時、アイツらは石化しなかったんだろう・・・ 目をみたその時、全員が石になったって言うのに・・・』

テュードは月の光が反射するサングラスで自分の顔を見つつ、考えていた。

この目を隠すために作ったサングラス、理由は直視石化を防ぐためだ。

眼光を飛ばす事も可能だったが、あの時で放った眼光で力を使い果たし、もう飛ばす事は出来なかった。

そして、自分の目を見て話していたプロミスとブラベリー。

ブラベリーは聞かない事はすでに分かっていた事だが、プロミスはわからなかった。

『もしかしたら俺は、あの時からアイツの事を心で許してしまってたのかもな・・・』

テュードはそんな事を考えつつ、サングラスを下ろした。

《もう暴力や、汚い行動でしか恨みや憎しみを晴らすしかないなんて考える奴なんて！！ 馬鹿なんだよ！！！！》

《だがたとえ生まれ変わったからと言っても、もう同じ過ちをしてはいけないんだ。》

《そのためにマスターは、俺達を作り直してくれたんだ。》

『・・・ 皆と仲良く暮らせる時が、また来るのかな・・・』

テュードはそんな事を考えつつ、その日の綺麗な月を眺めていた。

—E P I S O D E E N D—